

# 夏目漱石の小説にみえる「相対女性語」の考察

男性が使用する場合を中心に

寺田 智美

キーワード

女性語 明治末期 会話文 文末表現 夏目漱石

## 1 はじめに

稿者は拙稿（2000、2001、2002）において、男女差の観点から夏目漱石の作品の会話文を分析し、絶対女性語・絶対男性語・相対男性語<sup>(1)</sup>について考察してきた<sup>(2)</sup>。本稿ではこれまで拙稿でとり上げてこなかった相対女性語<sup>(3)</sup>について、特に相対女性語を男性が使用する場合を中心に考察を行い、明治末期に見られた女性らしい表現の特性について考えてみたい。

## 2 使用したテキスト・分析対象・分析方法

使用したテキスト・分析対象およびその分析方法は、拙稿（2000、2001、2002）と同様である。重複するが、以下に簡潔に記す。

### 2-1 使用テキスト

テキストとして、夏目漱石の小説から以下の作品を使用した<sup>(4)</sup>。

- 
- (1) 本堂（1970）で使用された用語による。
  - (2) 拙稿（2000）では絶対女性語、（2001）では絶対男性語、（2002）では相対男性語をとり上げた。
  - (3) 男女ともに使用するが、どちらかといえば女性の方が多く使用する傾向が強い表現のこと。拙稿（2000）171頁参照。
  - (4) 作品の詳細については、拙稿（2000）169頁を参照されたい。

『吾輩は猫である』『草枕』『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』  
『彼岸過迄』『行人』『道草』『明暗』

## 2-2 分析対象

上記作品の会話文(「 」でくくられたもの)の文末表現29類(= 表現 A ) およびその下位分類(バリエーション)603種(= 表現 B )を分析の対象とした。抽出した 表現 A 29類は以下のとおり。

あ/い/え/か/かしら/かしらん/こと/さ/ぜ/ぞ/たい(方言)/ちゃ/つけ/  
て/てば/とも/な/なあ/ね/ねえ/の/のう/ばい(方言)/まい/めえ/もの/  
や/よ/わ

表現 B 603種については、拙稿(2000)を参照されたい<sup>(5)</sup>。

## 2-3 分析方法

上に示したそれぞれの文末表現について、相対男性語・相対女性語の分析を行うにあたり、以下のような数式を用いた。

【計算式Ⅰ：ある 表現 A を各性別が使用する割合(=可能性)を算出する】

### a 相対男性語の場合

(ある 表現 A を用いる男性の 話し手人数 A ÷ 男性話し手の全人数 133 )  
×(男性がある 表現 A を用いる度数 男性使用度数 A ÷ 男性の全度数 7725 )

### b 相対女性語の場合

(ある 表現 A を用いる女性の 話し手人数 A ÷ 女性話し手の全人数 70 )  
×(女性がある 表現 A を用いる度数 女性使用度数 A ÷ 女性の全度数 3741 )

【計算式Ⅱ：各 表現 A の「性格(=男性語的か女性語的か)」を算出する】

### a 男性が女性の何倍使用しているかを計算した場合

ある 表現 A を男性が使用する割合 ÷ ある 表現 A を女性が使用する割合

(5) 拙稿(2001、2002)の【注】に、拙稿(2000)の表の訂正箇所を掲載した。そちらも合わせて参照されたい。

## b 女性が男性の何倍使用しているかを計算した場合

ある 表現 A を女性が使用する割合 ÷ ある 表現 A を男性が使用する割合

これらの計算の結果は、拙稿（2002）の【表Ⅰ 表現 A を使用する割合】に示してある<sup>(6)</sup>。さらに各 表現 A の「割合（可能性）」と「性格」との関連をみるために、この表を男性または女性が使用する割合順に並べ替え、拙稿（2002）【表Ⅱ 表現 A の使用順位（割合順）】を作成した<sup>(7)</sup>。

最後に、拙稿（2000）【表Ⅱ 表現 B の使用度数】から抽出基準<sup>(8)</sup>を満たす 表現 B を抜き出し、上記計算式を当てはめてそれぞれの「性格」と「割合」を算出、男性語的性格の強い表現（＝相対男性語<sup>(9)</sup>）および女性語的性格の強い表現（＝相対女性語）を抽出した。本稿で扱う相対女性語については、本稿155頁以降【表 a ~ h】を参照されたい。

## 3 相対女性語の分析

### 3-1 抽出された相対女性語

拙稿（2002）【表Ⅰ 表現 A を使用する割合】<sup>(10)</sup>によって相対女性語として抽出されたのは、女性語的性格の強い順に

て の ね え も の と も ち ゃ よ か し ら

の 表現 A 8 類であった<sup>(11)</sup>。これらの表現を女性が使用する割合順<sup>(12)</sup>に並べ

(6) 【計算式Ⅱ a】の数値が大きいほど男性語的性格が強く、【計算式Ⅱ b】の数値が大きいほど女性語的性格が強い、また数値が1に近づくほど、中性的な表現であると解釈した。拙稿（2002）191頁参照。

(7) 男性の場合は男性語的性格の強い表現が、女性の場合は女性語的性格の強い表現が【表Ⅱ】の上方に位置することが理想的、と解釈した。拙稿（2002）192頁参照。

(8) 「話し手5人以上、総用例数5以上」を抽出基準とした。拙稿（2000）172頁参照。また、【表現 B の使用度数】は拙稿（2000）184-186頁参照。

(9) 相対男性語に分類された 表現 A は、表現 A ぜ な あ や か し ら ん あ な っ け さ い ま い か ね の12類、詳細は拙稿（2002）193-197頁【表Ⅲ a ~ l】にまとめた。

(10) 本稿末に、拙稿（2002）で示した【表Ⅰ 表現 A を使用する割合】を参考資料として掲げた。

(11) 拙稿（2002）181-182頁参照。

てみると、女性語的性格の強さと使用する割合の高さが一致していないことがわかる。例えば、女性語的性格があまり強くない 表現 A よ が最も高い割合で女性に使用される一方で、女性語的性格が強い 表現 A ねえ は、さほど高い割合で女性に使用されてはいない。

さらに【表Ⅱ 表現 A の使用順位（割合順）】を見てみると、女性が使用する 表現 A の 1～3位は よ ね か である。うち、相対女性語の よ については次節で考察するが、これら 3類はいずれも男性が使用する 表現 A の 1～3位も占めている。このことから、承接や意味用法などの違いはあれ、よ ね か は基本的に男性語・女性語の境界を超えて、広く使用される表現であることがいえると思う<sup>13)</sup>。

また、女性が女性らしい表現を頻繁に使用するのであれば、理想的な形としてはこの表の上方に網掛け部分（＝相対・絶対女性語を示す）が集中するのが望ましいわけだが、実際は 9～11位に女性語に挟まれる形で相対男性語 い さ な が位置している。これらの相対男性語をどういう形で女性が使用しているかについては、拙稿（2002）を参照されたい<sup>14)</sup>。

以下、本稿末に掲げた【表 a～h 表現 B を使用する割合】に基づき、各表現についてそのバリエーション 表現 B も加味しながら考察していく。表中の網掛け部分は、本稿で扱った資料の分析結果によって、すでに絶対男性語・絶対女性語に分類されたものである。表の上から絶対男性語、相対男性語、相対女性語、絶対女性語の順で並べられていると理解されたい。

### 3-2 各 表現 B の性格 【表 a～h】参照

#### 3-2-1 表現 A て 【表 a】参照

今回の分析で、表現 A て は絶対女性語に分類された こと・わ 以外の表現の中では、最も女性語的性格の強いものと位置づけられた。その使用例

(12) 本稿末に拙稿（2002）の【表Ⅱ 表現 A の使用順位（割合順）】を参考資料として掲げた。

(13) ね か については拙稿（2002）187-188頁参照。

(14) い さ については拙稿（2002）186-187頁、な については同185頁参照。女性が い さ を使う場合は敬体の有無が関わっていること、な を使う場合は命令表現に限っていることを述べた。

のうち、男性の使用例が見られたのは 表現 B ですって 2 例

「岡本へ行っちゃ何故不可いんですって」 [明暗65：津田由雄 藤井真事]<sup>(15)</sup>

「何ですって」 [明暗162：岡本 津田延子]

だけであり、この2例があるために 表現 A て が絶対女性語に分類されなかったことはすでに拙稿（2000）で述べたとおりである<sup>(16)</sup>。一方、女性は 表現 B ですって を14人が37例使用していた。

「御用が有るんですって」 [三四郎216：野々宮よし子 野々宮宗八]

「市さん、もう用意が出来たんですって」

[彼岸過迄182：田口千代子 須永市蔵]

現代において、男性が だって という文末表現を使うことについて抵抗感を持つ日本人はほとんどいないであろうことを考えれば、男性の だって という使用例が見られてもよいと思うのだが、今回の分析では1つも使用例が得られなかった。そこで、 だって に準じる文末表現を探したところ、 だって に ね が接続した だってね の用例が、男性10人/14例、女性1人/1例得られた。

「新聞には君が書いたとしてあるが実際は佐々木が書いたんだってね」

[三四郎256：広田先生 小川三四郎]

「へえ、安さんは神戸へ行っただってね」 [門26：野中宗助 野中御米]

「それがね、熱は三十八度か八度五分位なんだから、そんな筈はないと思って、お医者さんに聞いて見ると、神経衰弱のものは少しの熱でも頭が変になるんだってね」

[行人256：長野の母 長野二郎]

少なくとも漱石の作品においては、男性は だって ではなく、 だってね を使用しているようである。

今後、他の作品において て の用例がどうなっているのか、また、もしこの時期の男性が て を使用しないのであれば、大正以降にどのような経緯を経て て が男性に浸透していったのかを分析していく必要がある。

(15) 用例冒頭の は男性の用例、 は女性の用例を示す。また、[ ]の中の数字は新潮文庫の頁を示す。

(16) 拙稿（2000）177頁参照。

### 3-2-2 表現 A の 【表 b】参照

表現 A の のうち、相対女性語に分類されたのは 表現 B じゃないの？・の？・の・尊敬+の？ の4種であった。

「だって玉子はおんなに出たじゃないの」 [明暗60：藤井真事 津田由雄]

「でもシーザーの死ぬ前に彗星が出たっていうじゃないの」

[明暗215：岡本一 岡本]

「だって今日は貴方がお医者様へ入らっしやる日じゃないの」

[明暗109：津田延子 津田由雄]

「何時来たの」

[三四郎253：広田先生 小川三四郎]

「何を御買いになる積だったの」

[道草230：御住 健三]

「余程余裕があると見えるの。」

[虞美人草317：浅井 小野清三]

「ええ、気迷れに一寸結ってみたかったの」

[それから232：平岡三千代 長井代助]

「何処へいらっしやるの」

[それから172：長井誠太郎 長井代助]

「誰と誰が一所に御飯を召上るの」

[明暗141：津田延子 岡本住]

全体の傾向としては、敬体の有無が性差に反映しているといえそうである。

尊敬+の？ の男性の使用例が1例見られるが、話し手は中学生の長井誠太郎であり、目上に対して使用された表現である。また じゃないの？ の用例はすべて『明暗』の藤井真事・岡本一のもので、いずれも子供の用例である。

の？ は『明暗』の藤井真事や『三四郎』の広田先生、『それから』の長井代助の用例が見られ、比較的広い年齢層の男性に使われていたことがわかる。一方、の は かの を多用する『虞美人草』の浅井の用例が見られるだけであった。

これらのことから、表現 A の の中では の？ のみが一般男性も使用しうる表現であり、それ以外は女性や子供らしさが反映された表現であるといえることができよう。

### 3-2-3 表現 A ねえ 【表 c】参照

男性は ですねえ・ねえ の他に、抽出基準外のものとして だからねえ・だねえ・ですかねえ・ねえ(命令)を使用している。ねえ の用例数は、全部合わせても39例しかなく、うち男性の 敬体+ねえ の使用例は ですかねえ 1例、 ですねえ 2例だけである。敬体の有無が性差に表れる表現の一

つといえる。

「少し変ですねえ」 [道草71：健三 比田寅八]

「おやまあ写真でですねえ。」 [猫198：苦沙弥妻 迷亭]

「出たねえ。」 [虞美人草247：井上孤堂 小野清三]

「いやな猫ねえ」 [猫35：お三 苦沙弥子供]

### 3-2-4 表現 A もの 【表 d】参照

だもの は相対男性語、ですものは相対女性語に分類される。これも敬体の有無が性差に反映する典型的な表現ということができよう。

「描けないんだもの。」 [三四郎169：原口 広田先生]

「始めから由雄さんの方が悪いに極ってるんだもの」  
[明暗89：藤井朝 津田由雄]

「なぜって、まだ宵の口で人が大勢通るんですもの」  
[猫421：水島寒月 苦沙弥先生]

「私、何故だか、ああ為たかったんですもの。」  
[三四郎198：里見美禰子 小川三四郎]

### 3-2-5 表現 A とも 【表 e】参照

抽出基準を満たすものは ですとも だけであるが、基準を満たさないものも含めれば、比較的是っきり敬体の有無で性差を判断できる表現であるといえる。ただ用例が少ないため、今後さらにデータを補充していった上で結論を出したい。

「本当ですとも。」 [明暗243：小林 津田延子]

「賛成ですとも。」 [それから46：長井梅子 長井代助]

### 3-2-6 表現 A ちゃ 【表 f】参照

今回の分析の計算では、相対女性語に分類されているが、実際の用例数やバリエーション 表現 B の使用状況を見ると、相対男性語に分類されてもおかしくない表現である。

抽出基準を満たしていたのは 表現 B ちゃ だけで、【表 f】を見ただけでは傾向を見いだすことはできない。ただ抽出基準外のもをみると、用例数は少ないものの、男性も敬体を伴う ちゃ、すなわち お+なすっちゃ・お

+になっちゃ・くださらなくっちゃ を使用しており、敬体の有無で性差を判断することがしにくい表現であることがわかる。

「もう時間だ、そろそろ出掛けなくっちゃ」 [明暗476：津田由雄 津田延子]

「何か極めなくっちゃ」 [明暗203：岡本継子 津田延子]

### 3-2-7 表現 A よ 【表 g】参照

表現 A よ は、相対女性語に分類されてはいるが、実は男性にも高い割合で使用されている表現である。参考資料 【表 I】を見ればわかるとおり、その使用度数は第3位である。このことは、表現 A よ 自体が女性語的性格を持っていながら、男性にも頻繁に使用される文末表現でもあることを示している。

【表 g】をみると、表の下方に行くにしたがって 言い換えれば女性語的性格が強くなるにしたがって 敬体が絡んできていることがわかる。全体としては敬体の有無が性差に影響する表現ということができよう。

表現 B のよ には特に敬体の有無による下位区分を設けなかったが、敬体の有無にかかわらず、のよ は女性の用例しか得られていない。これは の 自体の女性語的性格の強さによるものと考えることができよう。 の があるにもかかわらず、のだよ が相対女性語には分類されていないのは、 の の女性語的性格よりも だ の男性語的性格の方が勝っていることを意味していると思う。これは接続にかかわってくる問題であるため、稿を改めて分析してみたい。

「そりゃ下宿からこんな所へ移るのは好かあないだろうよ。」

[門67：野中宗助 野中御米]

「そうしみったれた真似も出来まいし、それにあの島田って爺さんが、ただの爺さんと違って、あの通りの悪党だから、百円位仕方がないだろうよ」

[道草265：比田夏 健三]

「平岡、僕は君より前から三千代さんを愛していたのだよ」

[それから277：長井代助 平岡常次郎]

「けれども阿爺が、あの金時計を一にやると御言いのだよ」

[虞美人草119：甲野母 甲野藤尾]

「己の綾成す事の出来ないのは子供ばかりじゃないよ」

[行人191：長野一郎 長野二郎]



「怒ったんじゃないよ。」 [明暗131：岡本継子 岡本百合子]  
「紙入は疾うから空っぽになっているんだよ。」 [道草137：健三 御住]  
「癪で肥る事が出来ないんだよ。」 [道草14：比田夏 健三]  
「書留がそんな中に入ってる訳がないよ。」 [明暗19：津田由雄 津田延子]  
「一さんは犬みたいよ。」 [明暗214：岡本百合子 津田延子]  
「まだ片付きませんよ。」 [三四郎100：佐々木与次郎 野々宮宗八]  
「だから標札は当にゃなりませんよ。」 [猫128：金田鼻子 鈴木藤十郎]  
「だって御父さんはそう云ってましたよ。」 [それから77：長井誠太郎 長井代助]  
「綺麗な人間も大分見ましたよ。」 [虞美人草212：甲野藤尾 小野清三]  
「ところが僕はその前をちゃんと知っているんですよ。」 [明暗244：小林 津田延子]  
「あなたその端書は比田さんから来たんですよ。」 [道草60：御住 健三]  
「私しの名は越智東風ではありません、越智こちですと必ず断りますよ。」 [猫58：水島寒月 迷亭]  
「大事になさらないと、ぶり返しますよ。」 [三四郎280：里見美禰子 小川三四郎]  
「そりゃ、御廃しよ。」 [それから70：長井誠吾 長井代助]  
「口じゃとても敵いっこないからお止しよ。」 [明暗221：岡本住 津田延子]  
「いや別になって貰いたいという意味じゃありませんよ。」 [明暗248：小林 津田延子]  
「御自慢程じゃありませんよ。」 [猫370：雪江 苦沙弥妻]  
「何って別にする事もないでしょうよ。」 [明暗88：津田由雄 藤井]  
「どうせ解らないから変なんでしょうよ。」 [明暗292：堀秀子 津田由雄]  
「何も永く前歯欠成を名乗る訳でもないでしょうから御安心なさいよ。」 [猫99：迷亭 金田鼻子]  
「いいから御廃しなさいよ。」 [虞美人草161：宗近系 宗近一]  
「なに、此所からはつい五六丁よ。」 [草枕98：大徹 余]  
「高飛よ。」 [三四郎151：野々宮よし子 里見美禰子]  
「若いに似ず了念は、よく遊んで来て感心じゃ云うて、老師が褒められたのよ。」 [草枕69：了念 職人]  
「何故そんな詰らない事を聞くのよ。」 [行人141：長野直 長野二郎]

### 3-2-8 表現 A かしら 【表h】参照

抽出基準を満たすものが 表現 B かしら しかないため、特徴は見いだしがたい。基準外のものをみても、敬体の有無で性差が使い分けられているとはいえない。ただ、よく似た表現である かしらん が相対男性語に分類されて

いることを考えれば、かしら の男性の用例が12人 / 15例あるものの、男性は かしらん、女性は かしら のように使い分けていた可能性があるのではなからうか。かしら と かしらん の意味の違いがあるかどうかも含め、今後検討していく必要がある。

「そういう論理になるかしら」

[明暗519：原 小林]

「何に結おうかかしら」

[彼岸過迄266：田口千代子 髪結い]

## 4 おわりに

### 4-1 相対女性語の特徴

以上、相対女性語を男性が使用する場合に着目して考察を行ってきた。拙稿（2002）で考察した相対男性語の特徴と、本稿で扱った相対女性語の特徴を比較すると、以下のようなことが概観できたのではないかと思う。

まず、相対男性語の特徴として挙げた「敬体の有無によって性差を表す表現が多い」という点は、相対女性語についても共通していることがわかった。また「敬体の有無ではなく、意味用法の違いによって性差が表れる」という点についても、の のところでも述べたとおり、話し手の年齢が大きく関係していると思われる表現が存在するという点で、相対男性語と相対女性語は共通しているといえた。

しかし、相対男性語を女性が使用する場合には、女性語的性格の強い表現が接続するものが見られたのだが、相対女性語を男性が使用する場合に男性語的性格の強い表現が接続するという現象は見られなかった。これは、女性語における「女性語らしさ」が男性語における「男性語らしさ」よりもはるかに強烈な個性を持ち合わせているため、と考えられるのではなからうか。つまり、男性語を女性が使う場合には、例えば絶対女性語のような女性語的性格を強烈に帯びた表現を接続させることによって「女性語化」できるのに対し、女性語を男性が使う場合には、何か男性語的性格の強い表現を接続させて男性語化するということはないのである。

今後はこの現象をさらに実証的に記述するべく、調査分析を進めていきたい。

#### 4-2 本研究の問題点と課題

女性語あるいは男性語の研究として、さまざまな研究者がさまざまな切り口で研究をしてきた<sup>17)</sup>が、それらをふまえた上で稿者が研究・分析の際に心がけたのは、「男性語・女性語の識別は、常識や内省、あるいは従来の研究による成果ではなく、あくまで数値的な処理で分類する」ということであった。結果、大きく従来の常識や研究成果と異なる分析結果が出たわけではないが、客観的手法による男性語・女性語の分類はできたのではないかと思う。

本稿および拙稿（2000、2001、2002）では、すべての表現を男性語または女性語に分類するというを試みたわけだが、数値的には相対男性語であるのに女性に高い割合で使用されていたりその逆であったりする表現、また限りなく中性に近い表現が存在したのも事実である。今後は中性的な表現の存在の扱いも検討していかなばなるまい。

すでに繰り返し述べていることであるが、本稿および拙稿で調査の対象としてきたのは夏目漱石の作品だけであるため、得られた結果は明治末期の言葉の性差というよりは「夏目漱石の作品中に見える言葉の性差」でしかない。また、言葉には性差だけでなく、職業や年齢などによる位相差も当然表れてくるはずであるが、これらについてはまったく言及していない。さらに分析対象が「文字資料」であるため、本来考慮すべきイントネーションなどの音素的な要素が考慮できないということも大きな問題点の一つであるが、これは文字資料を扱うがゆえの限界ととらえるしかないと思っている。

分析方法についても、例えば 表現B の設定に統一性がない、細かく分けすぎて抽出基準外のデータが多くなってしまった、形による分類にこだわったため、終助詞そのものの性格<sup>18)</sup>がまったく考慮されていないなど、今後解決すべき問題点は多い。

これらの問題点を解決する方法を模索しつつ、将来的には同時代の他の作家

---

(17) 石川（1972）、小松（1988）、鈴木（1976、1998）、中野（1991、1993）、中山（1952）、又平（2000）など。

(18) 鈴木（1976）60頁、同（1998）962頁。鈴木は終助詞を話し手中心の終助詞、聞き手中心の終助詞に分けて考察している。

による作品や時代の異なる作品<sup>(19)</sup>の分析を行った上で本調査との比較考察を行い、言葉の性差の変遷をとらえていきたいと思っている。

#### 【参考文献】

- 石川禎紀（1972）「近代女性語の語尾 「てよ・だわ・のよ」」『解釈』18-10
- 小松寿雄（1988）「東京語における男女差の形成 終助詞を中心として」『国語と国文学』65-11
- 鈴木英夫（1976）「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」『国語と国文学』53-11
- （1998）「現代日本語の終助詞 「な」を中心として」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』汲古書院
- 寺田智美（2000）「明治末期の女性語について 夏目漱石の小説にみえる「絶対女性語」の考察」『紀要（早稲田大学日本語研究教育センター）』13
- （2001）「明治末期の男性語について 夏目漱石の小説にみえる「絶対男性語」の考察」『紀要（早稲田大学日本語研究教育センター）』14
- （2002）「夏目漱石の小説にみえる「相対男性語」の考察 女性が使用する場合を中心に」『紀要（早稲田大学日本語研究教育センター）』15
- 中野伸彦（1991）「江戸語における終助詞の男女差 女性による「な」の使用について」『国語と国文学』68-4
- （1993）「終助詞の男女差の形成 江戸語における男女差形成の動き」『研究論叢（人文科学・社会科学）』43・第1部、山口大学教育学部
- 中山 崇（1952）「現代婦人語の終止表現について」『国学院大学国語研究』1
- 本堂 寛（1970）「文頭表現・文末表現に示される女性語意識 主として北奥方言について」『国語学研究』10
- 又平恵美子（2000）「明治・大正期の文末表現 終助詞「わよ」」『筑波日本語研究』5
- 山本正秀（1971）「近代小説の女性語」『解釈』17-12

---

(19) 例えば、山本（1971）は「明治大正の小説の女性の対話の場合、江戸っ児～東京育ちの線で、会話に苦心した作家には尾崎紅葉・広津柳浪・夏目漱石らがあり（以下略）」と述べている。

【表 a 表現 B を使用する割合 て】

表現 A	表現 B	男 性				女 性				割合の比較 女性の何倍 使用しているか	割合の比較 男性の何倍 使用しているか
		話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を男性が 使用する割合	話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を女性が 使用する割合		
て	ですって	2	2	1.00	0.000004	14	37	2.64	0.001978	0.0020	508.0824
	お+になって	0	0		0.000000	5	5	1.00	0.000095	0.0000	
	なすって	0	0		0.000000	6	8	1.33	0.000183	0.0000	
	尊敬+て	0	0		0.000000	11	14	1.27	0.000588	0.0000	
	なくて	0	0		0.000000	11	19	1.73	0.000798	0.0000	
	て	0	0		0.000000	13	43	3.31	0.002135	0.0000	

【表 b 表現 B を使用する割合 の】

表現 A	表現 B	男 性				女 性				割合の比較 女性の何倍 使用しているか	割合の比較 男性の何倍 使用しているか
		話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を男性が 使用する割合	話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を女性が 使用する割合		
の	じゃないの？	2	5	2.50	0.000010	5	10	2.00	0.000191	0.0510	19.6171
	の？	6	10	1.67	0.000058	31	171	5.52	0.020243	0.0029	346.6338
	の	1	3	3.00	0.000003	19	52	2.74	0.003773	0.0008	1292.1117
	尊敬+の？	1	1	1.00	0.000001	14	52	3.71	0.002780	0.0004	2856.2470
	なさるの？	0	0		0.000000	5	6	1.20	0.000115	0.0000	
	じゃないの	0	0		0.000000	5	7	1.40	0.000134	0.0000	
	なすったの？	0	0		0.000000	5	10	2.00	0.000191	0.0000	
	お+なの？	0	0		0.000000	7	12	1.71	0.000321	0.0000	
	なの	0	0		0.000000	11	18	1.64	0.000756	0.0000	
	なの？	0	0		0.000000	16	55	3.44	0.003360	0.0000	

- ・設定基準を満たしたもののみ表示。
- ・網掛けは絶対男性語または絶対女性語。
- ・二重傍線部は男性語と女性語の境界線を示す。

【計算式】

$$= \div$$

$$= ( \div 7725 \times ) / 133$$

$$= \div$$

$$= ( / 3741 \times ) / 70$$

$$= \div$$

$$= \div$$

【表 c 表現 B を使用する割合 ねえ】

表現 A	表現 B	男 性				女 性				割合の比較 女性の何倍 使用しているか	割合の比較 男性の何倍 使用しているか
		話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を男性が 使用する割合	話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を女性が 使用する割合		
ねえ	ですねえ	2	2	1.00	0.000004	3	4	1.33	0.000046	0.0850	11.7702
	ねえ	1	1	1.00	0.000001	5	6	1.20	0.000115	0.0085	117.7025

【表 d 表現 B を使用する割合 もの】

表現 A	表現 B	男 性				女 性				割合の比較 女性の何倍 使用しているか	割合の比較 男性の何倍 使用しているか
		話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を男性が 使用する割合	話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を女性が 使用する割合		
もの	だもの	20	43	2.15	0.000837	7	9	1.29	0.000241	3.4793	0.2874
	ですもの	5	10	2.00	0.000049	22	122	5.55	0.010249	0.0047	210.6090

【表 e 表現 B を使用する割合 とも】

表現 A	表現 B	男 性				女 性				割合の比較 女性の何倍 使用しているか	割合の比較 男性の何倍 使用しているか
		話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を男性が 使用する割合	話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を女性が 使用する割合		
とも	ですとも	3	3	1.00	0.000009	2	2	1.00	0.000015	0.5735	1.7437

【表 f 表現 B を使用する割合 ちゃ】

表現 A	表現 B	男 性				女 性				割合の比較 女性の何倍 使用しているか	割合の比較 男性の何倍 使用しているか
		話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を男性が 使用する割合	話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を女性が 使用する割合		
ちゃ	ちゃ	17	21	1.24	0.000347	11	20	1.82	0.000840	0.4136	2.4178

【表 g 表現 B を使用する割合 よ】

表現 A	表現 B	男 性				女 性				割合の比較 女性の何倍 使用しているか	割合の比較 男性の何倍 使用しているか
		話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を男性が 使用する割合	話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を女性が 使用する割合		
よ	だろ	9	15	1.67	0.000131	1	1	1.00	0.000004	34.4088	0.0291
	のだよ	7	10	1.43	0.000068	1	2	2.00	0.000008	8.9208	0.1121
	じゃないよ	12	27	2.25	0.000315	3	4	1.33	0.000046	6.8818	0.1453
	だよ	42	340	8.10	0.013899	15	69	4.60	0.003952	3.5166	0.2844
	よ	55	490	8.91	0.026231	28	110	3.93	0.011762	2.2302	0.4484
	ませんよ	28	57	2.04	0.001553	13	19	1.46	0.000943	1.6469	0.6072
	ましたよ	15	30	2.00	0.000438	9	11	1.22	0.000378	1.1585	0.8632
	ですよ	41	158	3.85	0.006305	28	118	4.21	0.012617	0.4997	2.0011
	ますよ	24	54	2.25	0.001261	16	42	2.63	0.002566	0.4916	2.0344
	お+よ(命令)	5	13	2.60	0.000063	5	16	3.20	0.000305	0.2071	4.8288
	じゃありませんよ	4	5	1.25	0.000019	5	6	1.20	0.000115	0.1699	5.8851
	でしょうよ	2	2	1.00	0.000004	5	7	1.40	0.000134	0.0291	34.3299
	お+なさいよ(命令)	2	2	1.00	0.000004	13	23	1.77	0.001142	0.0034	293.2754
	名詞+よ	4	6	1.50	0.000023	23	167	7.26	0.014668	0.0016	627.9101
	のよ	1	1	1.00	0.000001	22	167	7.59	0.014030	0.0001	14414.6311
	尊敬+てよ	0	0		0.000000	5	5	1.00	0.000095	0.0000	
	わよ	0	0		0.000000	5	7	1.40	0.000134	0.0000	
	なさいよ(命令)	0	0		0.000000	6	7	1.17	0.000160	0.0000	
	尊敬+よ(命令)	0	0		0.000000	9	13	1.44	0.000447	0.0000	
	じゃないのよ	0	0		0.000000	13	26	2.00	0.001291	0.0000	
なのよ	0	0		0.000000	13	27	2.08	0.001340	0.0000		
てよ	0	0		0.000000	13	41	3.15	0.002035	0.0000		

【表 h 表現 B を使用する割合 かしら】

表現 A	表現 B	男 性				女 性				割合の比較 女性の何倍 使用しているか	割合の比較 男性の何倍 使用しているか
		話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を男性が 使用する割合	話手人数 B	使用度数 B	1人あたりの 使用度数	この表現を女性が 使用する割合		
し	かしら	12	15	1.25	0.000175	6	12	2.00	0.000275	0.6372	1.5694

参考資料 【表Ⅰ 表現A を使用する割合】

(拙稿2002より)

表現A	話し手総人数	総度数	男性				女性				割合の比較 女性の何倍 使用しているか	割合の比較 男性の何倍 使用しているか
			話し手人数 A	使用度数 A	1人あたりの 使用度数	この表現を男性が 使用する割合	話し手人数 A	使用度数 A	1人あたりの 使用度数	この表現を女性が 使用する割合		
ぞ	7	16	7	16	2.29	0.000109	0	0	0.000000		0.0000	
x たい	1	11	1	11	11.00	0.000011	0	0	0.000000		0.0000	
x ばい	1	11	1	11	11.00	0.000011	0	0	0.000000		0.0000	
x めえ	3	6	3	6	2.00	0.000018	0	0	0.000000		0.0000	
ぜ	39	186	38	185	4.87	0.006842	1	1	1.00	0.000004	1791.8058	0.0006
なあ	26	51	25	50	2.00	0.001217	1	1	1.00	0.000004	318.5999	0.0031
や	18	34	16	32	2.00	0.000498	2	2	1.00	0.000015	32.6246	0.0307
かしらん	9	11	8	10	1.25	0.000078	1	1	1.00	0.000004	20.3904	0.0490
あ	27	91	22	86	3.91	0.001841	5	5	1.00	0.000095	19.2893	0.0518
な	87	710	68	674	9.91	0.044609	19	36	1.89	0.002612	17.0784	0.0586
つけ	8	9	7	8	1.14	0.000055	1	1	1.00	0.000004	14.2733	0.0701
さ	69	708	55	651	11.84	0.034849	14	57	4.07	0.003047	11.4361	0.0874
い	58	678	46	603	13.11	0.026998	12	75	6.25	0.003437	7.8554	0.1273
x まい	35	60	27	51	1.89	0.001340	8	9	1.13	0.000275	4.8746	0.2051
x のう	3	9	2	7	3.50	0.000014	1	2	2.00	0.000008	1.7842	0.5605
か	141	2503	93	1952	20.99	0.176690	48	551	11.48	0.100997	1.7495	0.5716
ね	140	2727	89	1984	22.29	0.171863	51	743	14.57	0.144702	1.1877	0.8420
かしら	24	38	14	22	1.57	0.000300	10	16	1.60	0.000611	0.4906	2.0381
よ	133	2196	80	1224	15.30	0.095306	53	972	18.34	0.196724	0.4845	2.0641
ちゃ	31	47	20	24	1.20	0.000467	11	23	2.09	0.000966	0.4836	2.0680
とも	18	24	8	11	1.38	0.000086	10	13	1.30	0.000496	0.1725	5.7960
もの	51	203	22	60	2.73	0.001285	29	143	4.93	0.015836	0.0811	12.3261
ねえ	19	39	7	9	1.29	0.000061	12	30	2.50	0.001375	0.0446	22.4195
x え	3	4	1	1	1.00	0.000001	2	3	1.50	0.000023	0.0425	23.5405
の	48	464	12	35	2.92	0.000409	36	429	11.92	0.058976	0.0069	144.2696
て	27	148	2	2	1.00	0.000004	25	146	5.84	0.013938	0.0003	3580.1173
x こと	21	47	0	0		0.000000	21	47	2.24	0.003769	0.0000	
x てば	1	1	0	0		0.000000	1	1	1.00	0.000004	0.0000	
わ	30	434	0	0		0.000000	30	434	14.47	0.049719	0.0000	
合計 (異なり)	(203)	11466	(133)	7725			(70)	3741				

相対男性語

相対女性語

・ x (斜線) は基準(話し手5人以上、総度数5以上)を満たさないため、分析の対象としては除外すべきもの。  
 ・ 太字 は絶対男性語、 は絶対女性語としてすでに抽出済みのもの。

【項目の説明】 話し手総人数 = +  
 総度数 = +  
 男性の話し手人数  
 男性の使用度数  
 男性1人あたりの使用度数 = ÷  
 この表現を男性が使用する割合 = ( / 7725 × ) / 133 【計算式 a】  
 女性の話し手人数  
 女性の使用度数  
 女性1人あたりの使用度数 = ÷  
 この表現を女性が使用する割合 = ( / 3741 × ) / 70 【計算式 b】  
 割合の比較 男性は女性の何倍使用しているか = ÷ 【計算式 a】  
 割合の比較 女性は男性の何倍使用しているか = ÷ 【計算式 b】



参考資料 【表Ⅱ 表現 A の使用順位（割合順）】

（拙稿2002より）

男 性			割合の比較 女性の何倍 使用しているか	
使用度数 A	話手人数 A	この表現を男性が 使用する割合		
1952	93	0.176690	か	1.7495
1984	89	0.171863	ね	1.1877
1224	80	0.095306	よ	0.4845
674	68	0.044609	な	17.0784
651	55	0.034849	さ	11.4361
603	46	0.026998	い	7.8554
185	38	0.006842	ぜ	1791.8058
86	22	0.001841	あ	19.2893
51	27	0.001340	まい	4.8746
60	22	0.001285	もの	0.0811
50	25	0.001217	なあ	318.5999
32	16	0.000498	や	32.6246
24	20	0.000467	ちゃ	0.4836
35	12	0.000409	の	0.0069
22	14	0.000300	かしら	0.4906
16	7	0.000109	ぞ	
11	8	0.000086	とも	0.1725
10	8	0.000078	かしらん	20.3904
9	7	0.000061	ねえ	0.0446
8	7	0.000055	つけ	14.2733
2	2	0.000004	て	0.0003
0	0	0.000000	こと	0.0000
0	0	0.000000	わ	0.0000
7725	(133)			

割合の比較 男性の何倍 使用しているか	女 性			
	表現 A	この表現を女性が 使用する割合	話手人数 A	使用度数 A
2.0641	よ	0.196724	53	972
0.8420	ね	0.144702	51	743
0.5716	か	0.100997	48	551
144.2696	の	0.058976	36	429
	わ	0.049719	30	434
12.3261	もの	0.015836	29	143
3580.1173	て	0.013938	25	146
	こと	0.003769	21	47
0.1273	い	0.003437	12	75
0.0874	さ	0.003047	14	57
0.0586	な	0.002612	19	36
22.4195	ねえ	0.001375	12	30
2.0680	ちゃ	0.000966	11	23
2.0381	かしら	0.000611	10	16
5.7960	とも	0.000496	10	13
0.2051	まい	0.000275	8	9
0.0518	あ	0.000095	5	5
0.0307	や	0.000015	2	2
0.0006	ぜ	0.000004	1	1
0.0031	なあ	0.000004	1	1
0.0490	かしらん	0.000004	1	1
0.0701	つけ	0.000004	1	1
0.0000	ぞ	0.000000	0	0
			(70)	3741

- ・ 太字 は絶対男性語、 は絶対女性語
- ・ は【表Ⅱ】において相対男性語と分類されたもの（白い部分）
- ・ は【表Ⅱ】において相対女性語と分類されたもの（網掛け部分）
- ・ 太線部は相対男性語と相対女性語の「理想的な」境界線の位置を示す。それぞれ絶対男性語・女性語を除いた上から12列目・8列目に引いた。